

昭和五十五年の春、全抑協鯖江支部が結成され、引き続き今立支部が結成いたしました。このとき本部より西村副会長さんと渡辺事務局長さんのお二人が花を添えて御出席下さいました。石川君そして白崎君も一所懸命協力してくれました。

おかげで七十五人全員が入会して当時は盛大だったが、年波（大正生まれ）には勝てず、今は約半数くらいです。でも皆互いに助け合っています。私もアングレン炭鉱で同じく苦勞した石川氏を紹介しました。

（福井県 佐々木 清左夫）

## 色丹島からシベリアへ

福井県 豊田 武夫

第一回目の召集は昭和十七（一九四二）年四月十日、敦賀第三十六部隊に入営三カ月の教育召集を受け、帰宅後は出征兵士の家（普れの家）の奉

仕を一カ月間に四回は手伝いに行きました。それが十七年八月より十九年の召集まで続きました。

二回目の召集は昭和十九年七月三日午後、役場から来て小さい子供に大切な赤紙（召集令状）を渡して帰りました。夕方役場に行き、小さい子供に大切な赤紙を渡してと叱りに行きますと、「悪かった、どうかご勘弁願います」と（留守番の妹は七歳くらいでした）。

第二回目の召集では、敦賀第三十六部隊の雪中演習場で七日間くらい訓練し、夜中に大命が下り出発。気比神宮に参拝し、四時発の軍用列車（窓のヨロイ戸を閉め）で出発、品川駅で昼食、車内で宮城遙拜。一路青森に向けて出発、青函連絡船にて函館に到着、根室までの沿線各駅で国防婦人会の方々のお茶、バレイシヨ等の接待を受け感謝でいっぱいでした。

兵器受領ができず市内の寺院（耕雲寺）に七日くらい滞在、夜十時五トンぐらいの漁船で色丹島に上陸、島民たちは上機嫌で迎えてくれた。島民

の小さな小屋を軍に無償で抛出（私たち一分隊のみ）。

その夜、イカの刺身を腹いっぱい食べたのがたり、翌朝下痢で大変でした。三日目くらいから軍務につきましました。しかし食料が少ないので、中隊より五、六人をフキとり、海藻ひろい。残りの兵は三角兵舎作り、雪が降ると言うので一生懸命です。私は海岸の大岩に穴を掘り上陸以来毎日陣地作りでした。小隊長、分隊長、私の三人で穴掘りです。

たまには小隊長と巡察に出て、地方の漁師と世間話ができ、いろいろおもしろい話が聞けた。また娘さんも軍隊の話聞かせてと寄ってきたこともある。偉い将校さんより兵隊さんがいいわねと娘さん三、四人で話していた。

もうその時は戦争も終わりだよとウワサ話が出ていました。

何しろ陣地作りにダイナマイトが不足でした。鉄棒とハンマーでちよつとずつ掘っていくので、

仕事は進みません。陣地作りに自由に火薬を出せば陣地も道路も早くできたのにと兵隊同士で話していた。色丹島に上陸してから俵給は支給されたことがなく、甘味品も少々でした。

三角兵舎と陣地作りの毎日が続きましたが、だんだん兵隊同士の間で戦況悪化の話が広がっていった。

天皇陛下のお言葉があり、島全体の兵士は集合せよとの命令があったが、中隊当番でしたので、行かずに兵隊の帰りを待っていた。午後二時ごろ帰ってきたので、何があつたかと聞くと、戦争は終わるか敗れたかよく分からないが将校は泣いていたよ、と言っていた。

ソ連兵が上陸するや武器の返納、軍隊手帳の焼却、全島兵士はアナマに集合、ソ連兵は見張りで一生懸命でした。時々私たちが手真似で話すと笑いながら相手になつてくれた。

アナマで二夜野宿でした。食事はカンパン少々、水一杯も思うようにならず、ソ連兵に従

う。倉庫には酒、タバコ、缶詰等いろいろありました。地方では見たこともないような品々でした。これらは将校さんらのものと思いました。

三日後ソ連の船に乗る。一夜明け昼ごろ、樺太・大泊で停泊、松尾部隊長が乗船、「八髭に顎髭」正に天神様を見るようです。樺太ではちよつと戦いましたよと申されました。松尾隊長は「勇壮」でした。ソ連兵は東京へ帰るという千島の兵隊と樺太の兵を乗せて東京へ帰るのだと言うが、だんだん変な方向に進む。そのとき、あれは沿海州だ、修学旅行に来たときと同じだ、間違い無い。船は北へ北へと、翌日午後三時ごろソフガワ二港に着く。

地方人が子供を連れて見に来ていた。

機関車はまきで走る、貨車は二段で上下三十人ずつ乗る、暖房にはまきをたく。目的地には三日後に着いた。

見たこともない四人のコロナ、中を見ると一階建て二段のベッド、一組四人である。トンボとい

う三中隊、内海、牧山、三田村、内藤隊の一部、これが私たち全保小隊です。通訳は神谷氏であった。

ソ連の将校五人と神谷さんが、ボイラー士がいまいかと尋ねられたが誰もいないので、ついに全保小隊に順番が回ってきたので、豊田、やります（若いころは酒造場でボイラー助手をしたことがある）と申し出ると、ソ連側と小隊長は喜んで、「アナタ」は明日から工場に来てくださいとのこととで、小隊長と二人でボイラーを見ましたら、火力（まき）だけで、メーターは圧力六十五まで、製材の動力と夜は電気を送るのです。五日間くらいはなかなか難しかったが、そのうちだんだん慣れてきた。

昭和二十二年ごろ第一回のダモイがあり、そのころ前々からボイラーの仕事をやりたいと申し出ていた木村、藤原、三山の三人が出てきたので、ソ連側は頑張つてやれと喜んでいた。

私は原木運搬役の日本人見回り指導者につきま

したが、特に馬の取り扱いは注意をするようにしました。

九三%くらいの仕事量で監督は「ハロツショ」と上機嫌でした。

このころより民主化運動が始まり、私は、将校と仲良しだ、民主運動に反するといつて、つるし上げを二回も受けたが、周りの人がかばってくれたので二回で終わりました。

一日の仕事を終えて、今夜はイ、ロ、ハの三人をつるし上げだ、夕食後集合せよと指導者より通達あり。この指導者は三人くらいで、この指導者と仲良くしまたは助手となれば外の仕事に出なくてもよい。民主運動の話し合ひではなかなか意見が合わないこともあり、アクチブに切り落とされる者も何人かあった。アクチブと話が合わず、またつるし上げとなる。

これからは外の仕事を十分(一〇〇%)になるように頑張った。監督からは、豊田はよいからアクチブをやめるように、ソ連側からも除外するよ

うにとあり安心した。何しろ私は「ペエルイ」ばかりで一級労働者でした。ダモイのときはムリーに集合して汽車に乘車、ハバロフスクまでは二日間でした。

私は給金も無く、ナホトカでは友人の住所等書いたものやタバコなどは全部取り上げられた。

引揚船信濃丸の航海中に大変な事件があったと話をしていた。

舞鶴港着、どうやら日本国へ我が家へ。金千円渡されたので、出迎えの子供や老人の土産に鉛筆四十本を買いました。

大野三番駅に鍬掛区水野氏、蔵生区広瀬氏と私の三人、十一月五日午後四時頃到着。自宅に着いた時には少々薄暗かったので一言お礼を申し上げた。

しばらくして、私が町で買物をしたのを駐在所が知っていたり、買物に行った店、友人の家に寄った事なども知っていた。

駐在所より福井市にあるGHQに呼び出しが来

た。米軍人がいて、在ソの話、帰宅後の身近な話を聞かれた。寒いにお茶も出さず、持参の弁当で午前十時〜午後三時ごろまで事情聴取されました。帰ってきたものの仕事も無く困りました。

同じような呼び出しは翌年の二月ころにもありました。

十九年七月より二十四年十一月五日までの留守が良い思い出になっており、食物の儉約、物を大切にしている気持ちがわいてきます。仕事も真剣にやり、また農地解放の話を知り、今まで宅地も無く昔の水のみ百姓が一躍大地主となり、区長や農家組合長等も受けた。

### 【執筆者の紹介】

現住所 福井県大野市堂本

生年月日 大正十年三月二十五日

昭和十七年四月 敦賀第三十六部隊に入隊

〃 十九年七月 〃

〃 〃 色丹島に転出

〃 二十年八月 入ソ抑留地ムリ、ソフガワニ  
〃 二十四年十一月 帰国 以後家業に従事

区長、東部土地改良委員、  
農家実行組合長等を歴任  
(福井県 林 俊男)

### 太平洋戦争とシベリア抑留記

長野県 大沢 正人

太平洋戦争も黄昏を迎える昭和十八(一九四三)年八月徴兵検査甲種合格。十九年一月八日、永年住み慣れた郷土を村中の皆さんに送られて出発。高崎東部三十八部隊に十日入隊す。伊那方面より二百余人、県下各地より大勢の現役が入隊。それぞれ各内務班へ配分された。私は重機関銃中隊に配属され、重機は二十三人と他の一般小隊より少ない。早速真新しい一装用が支給され、今ま